



松山市祝谷町1丁目5-33
愛媛県教育研究協議会
編集 情報宣伝部



愛教研綱領

われわれは、日本の伝統をふまえ、広く世界の進運に目を注いで、人類の福祉と文化の向上に役立つ、清新はつらつとした日本教育の充実発展にまい進する。

一、教育専門職としての使命感に徹し、正常な教育の進展をはかる。

一、研究を積み、人格と識見を高め、教職員の誇りと責任を自覚する。

一、身分の保障、勤務条件の改善に努め、社会的・経済的地位の向上をはかる。

一、児童生徒とともに生き、国民の信頼と期待にこたえる。

一、会員の親和を密にし、友好団体と提携して、組織の強化拡充をはかる。

第二回 教育研究推進協議会(理事会②)を開催

県民の期待と信頼に応える

教育研究団体を目指して

六月四日(金)に第二回教育研究推進協議会(理事会②)がエスポワール愛媛文教会館で開催された。五月の定期総会は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況に鑑み、書面表決となったが、決議された活動方針に基づいて、組織の活性化に努め、県民の期待と信頼に応える愛教研を目指して、各局から諸事業についての具体案が提案された。六月から十一月までの主な活動内容は次のとおりである。

教育研究局

◎第四十八回愛媛県教育研究大会(統一大会)

・八月四日(水) 十三時
・会場 愛媛文教会館

◎「子どもが変わる教育の推進」
・演題「童話『もも太郎』から『考える』を考える」
・講師 平松 義樹
・会場 愛媛大学名誉教授

◎「基調提案・研究推進報告等」
・研究指定校
・新居浜市立金子小学校
・新居浜市立南中学校
・研究指定校アドバイザ

・新居浜市立金子小学校
・新居浜市立南中学校
・研究指定校アドバイザ
・愛媛大学教育学部教授
・日野 克博

組織局

◎青壮年教職員夏季合同研修会 中止

・八月五日(木)
・会場 愛媛文教会館

◎壮年教職員研修会
・八月二十八日(土)に延期
・会場 愛媛文教会館

◎四年目研修会(四年目絆プロジェクト)
・延期
・期日未定

◎青年教職員研修会(INGプロジェクト)
・延期
・期日未定

◎青年教職員研究大会
・十一月十三日(土)
・会場 愛媛文教会館

専門局

◎養護教員リーダー研修会 中止

・六月十七日(木)
・会場 愛媛文教会館

◎健康教育夏季研究会
・八月十七日(火)
・会場 愛媛文教会館

◎永井 成美
・会場 愛媛文教会館

◎第四十二回愛媛県養護教員研究大会
・十一月十二日(金)
・会場 愛媛文教会館

◎樋口 桂
・会場 愛媛文教会館

◎(文京学院大学保健医療技術学部准教授)
・会場 愛媛文教会館

◎(愛媛県教育委員会保健体育課指導主事)
・会場 愛媛文教会館

◎(愛媛県生涯学習センター)
・会場 愛媛文教会館

◎第五十四回愛媛県公立小中学校事務研究大会(今治大会)オンライン開催(予定)

・十月二十九日(金)
・会場 今治市中央公民館 他

◎養護教員部リーダー研修会
・七月二十七日(火)

法制情報局

◎第一回いっせいの職場集会
・六月八日(火)～七月十八日(金)
・令和三年度の要望(案)検討

◎第二回いっせいの職場集会
・六月中旬～十一月中旬
・各支部の実情に応じて実施

◎教育法令研修会
・八月十九日(木)
・会場 愛媛文教会館

◎(愛媛県顧問弁護士)
・武田 秀治

◎令和三年度愛媛県へき地域教育研究大会
・十一月二日(火)
・会場 上島町立弓削小学校

◎上島町立弓削中学校
・会場 上島町立弓削中学校

◎公開授業、分科会、全体発表、研究発表、研究協議等

福利厚生局

◎第四十八回教育文化講演会
・八月二日(月)
・会場 松前総合文化センター

◎澤田 真由美
・合同会社 先生の幸せ

◎愛教研ピラティス教室
・八月十日(火)
・会場 愛媛文教会館

◎木下 絵理
・PHEビラティス認定

◎愛教研ライブプランセミナー
・八月二十日(金)
・会場 愛媛文教会館

◎大橋 正嗣
・教職員共済生活協同組合事業推進部審議役

◎四国教育合同研修会 中止
・八月二十一日(土)
・会場 愛媛県

◎海外教育事情視察研修(台湾) 中止

◎支部別の会員数により割り当てられた約八十名が、旧五管内別に県外の先進校や施設を視察研修し、本県教育の充実発展に資する。

◎第三十八回全日本教職員連盟教育研究全国大会(香川大会) 中止

◎八月七日(土)～八日(日)
・会場 香川県

◎第七十二回日本連合教育会研究大会(香川大会)

・八月十八日(水)～十九日(木)
・会場 香川県高松市

郡市教科等委員長会・専門研究委員会

五月十九日(水)、愛媛文教会館において予定していた愛媛県教育委員会との共催による郡市教科等委員長・専門研究委員会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となったことに伴い、当日予定していた全大会での「挨拶」「指導講話」について、後日、寄稿していただいた。

挨拶



愛媛県教育委員会
義務教育課

課長 小池 達士

昨年度に引き続き、コロナ禍でのスタートとなった令和3年度。変異株への憂慮も含んだ新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に最大限努めながらも、各学校において、子供たちや保護者、地域の方にとって安全で安心な環境を提供するとともに、よりよい学びを実現するため、子供たち一人一人に丁寧に向き合う努力を続けていただいていることと思います。

このような中、実施を一月延長可能とする特例を設け

つつ、小学6年生と中学3年生全員を対象とした全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)が2年ぶりに実施されました。本調査の実施に当たり、萩生田文部科学大臣は、実施の目的の一つとして、「コロナ下の学習状況を把握し、児童生徒一人一人への教育指導の改善充実を図ること」を挙げました。今まで誰も経験したことのない状況の下、日々試行錯誤し、精一杯取り組んできた教育活動が子供たちの学力の定着にどれほど結び付いているかを把握するなど、本調査を有効に活用しながら、各校の実態把握と、それを受けての指導改善に生かしていただけたらと思います。

められました。その結果、今年度、県内全公立小中学校において、一人一台端末環境が整った状況でスタートを切ることができています。引き続き、子供たちの確かな学力の定着、向上を目指して、ICT機器の積極的な活用をお願いします。

県教育委員会では、この機会を捉え、昨年度、オンライン授業の方法等を学ぶため、教員を対象とした、民間企業の外部講師によるICT教育指導教員養成研修を実施しました。本研修内容の動画は、8月末まで、次の当該ウェブサイトにアクセスすることにより視聴できるようになっています。(URL) <https://img.box.com/s/ljfealy2rp2j76g4vq4hup46tvquev>【パスワード】ehimegao)

また、子供たちの学習の成果と課題の早期把握、個別最適化された学びの実現に資するため、今年度から新たに、えひめICT学習支援システム活用事業を立ち上げています。具体的には、県独自の学力調査や各学校における定期テスト・ドリル等をコンピュータ上で実施できるCBTシステムの開発と運用、学校の学力向上の取組の核となる学力向上推進主任を対象とした研修会のオンライン開催、中学生を対象とした英語力向上講座の実施などの取組を行います。定期テストやドリルのCBT化によって、教員のテスト業務における負担を軽減するとともに、教員がこれまで以上に一人一人の子供たちと向き合う時間を創出できることも期待できます。

さらに、授業でも家庭学習でも利用できる県教育委員会作成の学習シートをWeb上に掲載しています。シートの内容は、基礎的なもの、応用的なもの、技能の習得に関するものなど、多種多様です。特に、県総合教育センター「えひめ学習応援サイト」は、子供たちも自由にアクセスしてダウンロードすることが可能です。引き続き、それぞれに適切な場面での活用を働き掛けていただけたらと思います。

ICT機器の活用は、それ自体が目的ではなく、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育むための一つの手段です。各市町、各学校がそれぞれの実態に応じて創意工夫を凝らし、日々の教室における教育活動をはじめ、家庭学習や家庭生活の充実、不登校の子供たちへの支援等、目的に応じた幅広い活用を検討し、制限のある生活の中でも生き生きと過ごせるような提案を、子供たちや家庭に積極的にやっていただきたいと思います。

指導講話



愛媛県教育委員会義務教育課
教育指導グループ

総括担当 澤田 美和
係長

5月17日付け愛媛新聞「ヤング落書き帳」に掲載されていた中学生の投稿に、ふと目が留まりました。

「私は昨年、生徒会に入りまして。学校がよりよくなるようにと入った生徒会も、新型コロナウイルス禍で活動が制限されています。それでも、私たちにできることは何かと悩んだ結果、手洗い動画の作

成にいたりました。初めて昼の放送で流した時は、とても新鮮味があつて、反響も大きかったです。今では、多くの人が手洗いをしている姿をよく見かけます。限られた範囲の中で活動することはとても難しいことを知りました。でも手洗いが中学校全体で習慣になっていくことで、少しでも学校をよくできたのかなと思います。(略)

この投稿を読み、私は三つのことを感じました。

一つ目は、学校ならではの学びのよさです。生徒会の話合いの中で、互いの考えを発言し、何が効果的で即実践できるかといった視点で意見を集約しながら、手洗い動画の作成へとつながっていった生徒の生き生きとした姿が目には浮かんできました。多様な他者の意見を生かし合う学びは、集団で学ぶ学校教育のよさだと感じます。

二つ目は、人工知能にはない人間の力です。これまで経験したことのないことから何かを生み出そうとすることは、人工知能には難しいと言われています。新型コロナウイルス感染症対策という「新しい生活様式」の中で、自分たちができることを生み出そうとしている中学生の創造力は、人工知能にはないものだと

と思います。

三つ目は、達成感や自己有用感の重要性です。自分たちが学校を変えることができた達成感は、生徒の自信となり、更なる意欲向上、行動力へつながっていくと確信しています。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、社会の急激な変化は加速度を増し、既に複雑で予測困難な世の中となつていきます。そのような社会を生き抜く子供たちに確かな資質・能力を育成することとは、教師の使命です。この投稿を読んだ時、私は、県内の各学校において、先生方が工夫を凝らしながら、様々な教育活動を通して、子供たちの力を伸ばしておられることを実感しました。

さて、新学習指導要領が、小学校では昨年度、中学校では今年度から全面实施となり、各学校においては、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善に取り組んでいたことと思えます。義務教育課では、全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現のため、今年度も様々な事業に取り組むこととしております。ここでは、主な二つの事業について説明いたします。

一つ目は、「えひめICT学習支援システム活用事業」です。整備された一人一台端末を有効に活用しながら、効率的な学習による学力向上や先生方の負担軽減を図ることを目的として、今年度から新たに取り組む事業です。この学習支援システムは、県の学力調査だけではなく、各学校で実施している定期テストや授業中の定着度を確認するためのドリル等をCBT化し、各学校から問題をアップして日常的に活用できるよう開発しているところです。このシステムの実力を「採点機能」で説明すると、選択式・短答式の問題の採点精度は100%です。記述式の問題では、70%程度の精度となりますが、AIによる採点補助機能を搭載していることで、先生方の少しの確認作業で採点を終えることができます。これまで採点に費やしていた時間が大幅に削減される見込みです。また、問題バンク機能を備えているので、CBT化された定期テストやドリル等が県内の学校で共有され、他校においても自由に活用できるようになります。各学校のテスト問題を互いが知ることにより、テストの質の向上が期待されるとともに、作問に係る先生方の労力の軽減が図られます。さ

らに、テストの結果を瞬時に集計することができるよう、子供一人一人の課題がタイムリーかつ正確に分析・表示され、先生方は、授業中に即、個に応じた適切な指導を行うことができるようになります。子供たちも自ら学習を調整することができるようになります。今年度は中学校で運用を開始し、その後、小学校にも順次拡充する計画で進めています。このシステムの導入により、膨大な情報を生かした授業改善を推進するとともに、業務削減によって生み出される、子供に向き合う時間や、深い教材研究等を行う時間によって、本県の更なる学力向上につなげていきたいと考えています。

二つ目は、「不登校児童生徒等支援事業」です。不登校児童生徒に対する支援の最終目標は、将来の社会的自立を目指すことであり、そのために学校が果たす役割は大きく、全ての学校で取り組まなければならない喫緊の課題であるとの認識が必要です。昨年度から実施している、フリースクール等に通っている指導要録上出席扱いとなつていない不登校児童生徒に対する経済的支援に加え、今年度から、不登校ゼロを実現する本県独自の対策を確立するた

め、校内サポートルーム設置事業に取り組みます。不登校ゼロを実現するためには、子供の状態に応じた支援策を策定することが必要と考え、まず、不登校を三つのパターンに類型化しました。「①学校には行けるが、教室に入れない児童生徒」、「②学校には行けないが、適応指導教室やフリースクール等には通える児童生徒」、「③自宅に引きこもっている児童生徒」の3類型です。そして、それぞれの状況にある子供たちに応じた必要な手立てを考えました。①については、松山市、今治市、西条市の中学校4校を不登校対策モデル校として指定し、「校内サポートルーム」を常設して指導経験の豊富な先生が個別指導を行う体制を構築しています。このモデル校の効果的な支援策は、各学校での実践に生かすことができるよう、随時、情報共有してまいります。次に、②については、フリースクール等との連携体制を強化し、その活動状況を学校が把握できる体制を構築します。義務教育課では、フリースクール関係者、臨床心理士、大学教授等が参加する連絡協議会を年3回開催し、フリースクール等の活動内容、学校との連携の在り方等について協議する予定で

す。最後に、③については、やる気さえあれば学べる環境を用意していきます。整備された一人一台端末を有効に活用し、eラーニング等の学習支援を行ったり、web会議システム等によるオンラインでの朝の会や帰りの会等を実施したりしながら、自宅に引きこもっている子供たちが学校とのつながりを深められる支援策を考えていきます。各学校においても、様々な学びの機会の保障に努め、懸命に努力している子供たちを積極的に評価する取組を進めていただきたいと思います。そうした取組が全ての学校で推進されれば、「全ての子供が出席又は指導要録上の出席扱い」となります。不登校ゼロという数字を求めるための出席扱いではなく、出席扱いになるという事実が、不登校児童生徒の今後の意欲や、そうした子供の保護者にとつての安心材料につながり、全ての子供たちの可能性を引き出すことになると思っています。

「どうせやるなら明るく楽しく前向きに」これは、私が幼稚園に勤務していた時に、子供たちの姿から学んだことです。幼児期は、自分の生活を離れて知識や技能を一方的に教えられる身に付けていく時期ではなく、生活の中で

自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、生活を営むために必要なことが培われる時期です。幼児が環境に主体的に働き掛け、必要な能力や態度を身に付けている姿は本来の学びの姿であると感じていました。「明るく楽しく前向き」な意識は、周囲を巻き込み、自分だけでは思い浮かばないアイデアが集まり、想像を超えた実践につながっていくと思います。ぜひ、愛媛の子供たちのために、それぞれの立場で明るく楽しく前向きに御尽力いただきますよう、よろしくお願いいたします。

挨拶



愛媛県教育研究協議会

会長 玉井 啓二

昭和三十五年九月に結成された愛教研は、昨年度、創立六十周年の節目を迎えました。この記念事業として計画されていた記念式典や講演は、コロナ禍のために残念ながら中止を余儀なくされましたが、令和二年十一月七日（土）には、感染症拡大予防対策を徹底し、「愛教研未来への提言」をテーマに掲げた提言を開催することができました。また、令和三年三月末には記念誌「愛教研六十周年のあゆみ」を発刊することができました。ここに、本事業に携わってくださった皆様方に、改めてお礼と感謝を申し上げます。

このたび、創立六十一年目の新たな第一歩となる年に、私が愛教研会長の重責を担わせていただくことになりました。何分微力ですので、同志である会員の皆様方のお力を結集していただくことが頼りです。本年度の愛教研の活動につきまして、御理解と御協力を賜りますようお願いいたします。さらに、これまで愛教研を御支援いただいている関係諸機関の各位には、引き続きお力添えを賜りますようお願いいたします。

さて、本年度もコロナ禍の影響で、一堂に会しての郡市教科等委員長・専門研究委員会は中止といたしました。しかし、先に掲載しておりますように、例年、御挨拶をいただいております愛媛県教育委員会の義務教育課長様と、指導講話をいただいております

教育指導グループ総括担当係長様から原稿を頂戴し、学校を取り巻く課題や愛媛県として重視している対応策などを御教示いただきました。ここでも御指摘されているように、現在の小中学校では、新学習指導要領に基づく「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善、中教審答申「令和の日本型学校教育」に示された個別最適な学びと協働的な学びの具現化、いじめ問題や不登校への対応、学校の働き方改革やGIGAスクール構想の推進、さらには、新型コロナウイルス感染症対策の徹底など、喫緊の課題が山積しています。

このような状況を踏まえ、本年度の愛教研は、「愛教研第六十二回定期総会要項」の「令和三年度愛教研活動方針」に示しておりますように、「①確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を図る教育の推進、②一人一人を大切にされた教育の推進、③信頼される学校づくりの推進」を基本方針とし、教育研究局・組織局・専門局・法制情報局・福利厚生局の各局と各支部が中心となつて、それらの実現を目指します。とりわけ、既に会員の皆様にお届けしました「令和三年度研究の手引」には、昨年度はコロナ禍のために準備期間としました二年サイクル六年スパンの研究を再開し、本年八月四日に統一大会を開催するに当たつての研究の留意点及び各教科等委員会と各専門研究委員会の本年度の研究のねらいや研究の視点、留意事項などが示されています。これらは、「主体的・対話的で深い学び」を視点とした学習指導と評価の改善をはじめ、今日的課題への対応策などについて愛教研から発信したものです。ぜひ御確認の上、日々の授業実践で御活用ください。

結びになりますが、愛教研は、結成以来六十年間の活動で蓄積された教育財産を糧にして、様々な課題の一つ一つに誠実に向き合っていく組織であると私は確信しています。昨年度に引き続き、コロナ禍のために学校は様々な困難を抱えています。このような状況だからこそ、本年度も愛教研の諸活動において、会員の皆様同士が手を携えて互いの資質・能力の向上に努め、愛媛の子どもの幸福と地域教育の進展に力を尽くしていきます。



コロナ禍、二年目の春



副会長 越智 秀雄

今年度、副会長を拝命いたしました。昨年度はコロナ禍、一年目の春、専門局長として、養護教員部・事務職員部・栄養教員部の三部会の活動に参加させていただきました。各部会では部長を中心に、制限された状況の中でベストを尽くそうと、話合いと試行錯誤の連続でした。そして、その成果が県内小中学校の毎日の生活に反映されていることを目の当たりにした時、改めて、愛教研の意義と、活動されている先生方の存在の大きさを痛感しました。

今年度、コロナ禍で二年目の春がスタートしました。コロナ禍の収束を祈るとともに、昨年の実績を基に、会員の皆様が更にパワーアップして、御活躍されることを確信しております。私も玉井会長様の補佐はもちろんのこと、皆様のお役に立てるよう精一杯働き、共に汗をかいていこうと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

組織力と創造力で



副会長 宮岡 真司

本年度、副会長を務めさせていただきます。愛教研の組織力と会員の皆様の創造力で活動が充実するよう、微力ですが努めたいと思います。

さて、勤務校に十円玉を使うピンクの公衆電話があります。これは、電話線から電力の供給を受け、しかも通信が優先されて、停電や災害時にもつながるそうです。なんと骨太な通信方法でしょう。これがダイヤル式でなくプッシュ式なら、更に使いやすくなります。

愛教研には授業研究、生徒指導、専門性を高める研修、教職員間の連携等、積み上げてきた実践があります。これら骨太の財産を、時代に即した形にし、方法を工夫して大いに活用することが大切だと思います。コロナ禍で制約もありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

英知を結集して



副会長 渡邊 恵理

四月に一人の六年生から、全校児童と教職員分の手作りシトラスリボンが届けられ、一人一人に手渡されました。一か月後、運営委員会が、「シトラスリボンに込められた思いを受け止めて行動できているか振り返ろう」と全校に呼び掛けました。児童の胸には、今もシトラスリボンと決意が輝いています。一人の行動が、多くの人の行動を変えることを実感した一場面です。

愛教研活動では、コロナ禍においても歩みを止めず、新たな取組を提案し、教育研究を実践しています。「子どもたちの愛顔のために」という目的に向かって会員がつながる組織力の強さだと感じています。今後も会員の英知の結集と交流により、愛教研活動が一層実りあるものになるよう副会長として微力ながら職責を果たしてまいります。よろしくお願いいたします。

御協力をお願いします



副会長 稲葉 賢

今年度、副会長の役を拝命いたしました。先輩の先生方が築き上げてくださった伝統ある愛教研に、副会長として関わることができるとをとても光栄に思います。

学校では新型コロナウイルス感染症の影響で、いろいろな制約があり、対応に苦慮されていることと思います。そのような中で、新学習指導要領が小学校では昨年度から、中学校では今年度から全面实施されました。難局ですが、教育を停滞させることはできません。私たちが協力して、愛教研の活動方針にもあります「知・徳・体の調和のとれた『生きる力』を育む」ために共に頑張っていきたいと思います。そのために微力ながら努めさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。



しあさい

習うより慣れよ

ついに我が校にも「タブレット端末」がやって来た。使うのは研修を受けてからのんきに構えていた私だったが、同僚たちは早速、学級で児童に使わせている。「こんな便利な機能が」「効率的に使うには」など職員室での会話が前向きである。

思い起こせば新採の頃、重たいワープロを原付の足元に乗せて通勤していた私も、今はポケットにスマホが入っている時代。同僚たちに遅れること一週間。授業を受け持っている三年生の学級でタブレット端末に初挑戦。スイッチを探している私を横目に、どんどん次のステップに進む子。苦手な子に優しく教える子。(私も教えられた一人。)

生まれたときからスマホやタブレットが存在した子どもたちにとってはごく普通の姿か。「つながらん！」「落としたらどうする？」課題は多いが、今ある環境で今あるものを有効に使う。時代にも機能にも取り残されないように、「習うより慣れよ」の精神で、今日も保管庫の扉を開けよう。

情報宣伝部 常任部員
今治市立吹揚小学校

村上 才一

研究推進について



教育研究局

局長 渡部 ゆかり

昨年度は、先行き不透明なコロナ禍において、これまでのような教育活動が難しい状況にあり、学校の存在意義やこれまでの当たり前を改めて問い直すことが私たちに求められました。今年度になっても、県内各地で感染者が増え、新たな局面に対応が必要となり、学校現場は落ち着かない新年度の始まりでした。

そういった状況の中、昨年度は小学校、今年度から中学校で新学習指導要領が全面実施となりました。子どもたちが未知の状況にも対応できる資質・能力を育成することがいかに重要であるかが示され、学校教育の質的転換が図られようとしています。

そして、Society 5.0時代の到来により、5Gなどの技術革新が加速度的に進み、教職員世代交代が進む中にある、児童生徒を取り巻く諸問題を解決するためには、教職員の資質・能力の向上、学校

や地域における組織的な取組が一層重要になってきました。

特に、今年度は、「主体的・対話的で深い学び」の観点から学習指導と学習評価の改善に力を注いでいくことや、GIGAスクール構想に伴う一人一台端末の効果的な活用などの研究に取り組むことが喫緊の課題です。「一人一台の端末」を「高速大容量の通信回線」で結び、学習記録を「クラウド」に蓄積して活用するのが「GIGAスクール」の仕組みです。文科省ではこれを「誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化された創造性を育む教育」と呼んでいます。「学校教育ICT元年」は、試行錯誤の繰り返しとなるでしょうが、まずは子どもに身近に端末を置き、使いながら活用方法を考えるということではいいのではないかと思います。

それでは、今年度の研究推進について、説明します。

一 「主体的・対話的で深い学び」向かう授業「モデル」と「授業改善の視点・具体的な方策」の活用

愛教研では、今年度からの二年間（令和三年度～四年度）の第十三期は、新居浜市立金子小学校と新居浜市立南中学校を研究指定校とし、主に「対

話的な学び」に焦点を当てて、実践的な研究を推進していきます。そして、八月四日に開催されます第四十八回愛媛県教育研究大会（統一大会）において、二年間を見通した研究の内容や方法等を報告していただきます。研究指定校はもとより、各学校、各支部、各教科等・専門研究会において、大会主題「子どもが変わる教育の推進」主体的・対話的で深い学びに向かう授業の創造」の実現を目指して、ベテラン世代と若手世代がタッグを組んで、組織的に取り組んでほしいと思います。

「対話的な学び」の授業改善に関しては、「研究の手引」六頁に掲載しています「授業改善の視点・具体的な方策」のGからJを中心に各校の実態に応じて、アレンジして活用し、その有効性や妥当性を検証し、今後に向けて改善していただきたいと思っています。

二 研究交流の活性化

新学習指導要領の全面実施において、近隣の小中学校の連携は、学びの系統性、連続性を考える上で、かなり重要です。同校種や異校種の学校間で研究推進に関する情報を共有し、学校相互の教育活動の更なる向上に努めていただきたいと思っています。

三 教科等・専門研究会等の研究推進

愛媛県では、昨年度から四国大会規模以上の研究大会が毎年のように続いて開催されます。現在も多くの教科等委員会や専門研究会が中心となって、大会に向けて準備されていますが、このコロナ禍においては、例年のように研究が進められず、苦慮していると感じています。会議や大会の開催方法もいろいろな工夫が見られ、例えば、参集とオンラインを併用したハイブリッド型参加形式など、これまでとは異なる新しい方法が提案されております。研究大会への取り組み方も、新しいスタイルが生まれる過渡期にあります。各教科等・専門研究会委員会が教科等の本質を踏まえた研究実践や会員相互が結び付く場となるよう今後も研究交流を進めていただきたいと思います。

令和とともに新しい時代の到来を感じる昨今、六十一年目に踏み出した愛教研は、愛媛県教育委員会、愛媛県総合教育センター、愛媛大学の先生方から御指導をいただきながら、これからも質の高い教育職能団体として機能するよう取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

コロナ禍でも希望が持てる
組織局の活動を目指して



組織局

局長 松浦 博文

昨年度に引き続き組織局長をさせていただきます。本年度もどうかよろしくお願い申し上げます。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ほとんどの活動が中止となりました。計画に携わっていた先生方には、大変申し訳なく思っています。報告のたびに、「この状況だから仕方ないよ。」との慰めの言葉をいただき、少しだけほっとしました。

各学校においても、学校行事の縮小や延期、更に中止といった児童生徒にとって苦しい状況であったと思います。特に最終年度の子どもたちは思い出となる大切な行事がたぐさありませんが、我慢しながら、前向きに歩みを進めていました。その姿にたくましさを感じたのは私だけではないと思います。

六月から愛媛県は感染警戒

期への移行となりましたが、全国に目を向けると今なお感染は収まりを見せていません。様々な変異ウイルスが確認されており、気の抜けない日々が続きますが、感染症対策の徹底を継続し、できることから実践してまいりたいと思います。

本年度も組織局の活動方針は、時代や会員のニーズに適應する組織局活動を積極的に実施し、会員意識・連帯意識の高揚を図ることとしています。青年部では、「なすこと」によって学ぶ姿勢を前面に出し、東中南予別に行う「青年教職員研修会（INGプロジェクト）」「四年目研修会」「青年教職員研究大会」といった活動を実施し、体験活動を軸とした研修に努めます。また、壮年部では、豊かな経験と実践力を生かした魅力ある活動として「壮年教職員研修会」を実施します。残念ながら五月に予定していた「一期限付採用教職員研修会」は、本年度も実施することはできませんでした。講師の先生方に執筆していただいた冊子と受講希望者からの質問事項の回答を送付させていただきます。

実施に向けた方策を模索することを申し合わせました。他部局で行われていたオンライン形式の会議、人数を極力絞っての会議や行事の実施を考えています。

公民館活動で言われている「集い、学び、つながる」という目的は愛教研においても同様だと思っています。本来であれば、何の心配もせず、顔と顔を付き合わせ、語り合う場や学び合う場があり、新たなつながりへと発展するはずですが、もう少し我慢が必要で

す。先日、各支部の部長の方々に、様々な役を依頼いたしました。電話で「できることは何でもします。」と快く引き受けていただきました。どの方も、学校でも重責を担っているはずですが、さすが愛媛の先生方だと改めて思いました。何事においても、一緒に何かをやり遂げようとしてくれる仲間の存在がありがたく、愛媛の教育を支える力だと思っています。どうかよろしくお願



学びの環境づくり



青年部

部長 眞山 昭一

今年度も引き続き、壮年部長を務めさせていただきま

す。さて今年度も、新型コロナウイルス感染症の影響で、新学期は慌ただしく始まったのではないのでしょうか。昨年度に比べて、状況がよくなっているとは言えず、逆にウイルスが変異し、感染力が強くなってきたいます。このような状況の中、今後は、今後も続く予想され、ウイルスの感染が完全に収まってから活動を考えるより、このような状況の中でどのような活動ができるか、こちらが意識を変えて取り組まなければなりません。今後は、新型コロナウイルスと共存しながら、「学校の新しい生活様式」を考えていく必要があると思います。そこで今年度は、愛媛県下の先生方がどのような取組をされているか、情報を集めたり、取り組んでほしい活動を、

青年部と壮年部が協力しながら研修を行ったりして、少しでも教育活動に役立つ情報が提供できるようにしていきたいと思っています。

具体的には、まずICTをいかに活用するかが重要なポイントの一つだと思います。すでに、一人一台の端末を使ったGIGAスクール構想が始まっています。みなさんの学校は、どうでしょうか。また、コロナ禍における教科の学習では、制限の多い中で「主体的・対話的で深い学び」の授業を、どう展開し工夫されているのでしょうか。

愛教研としては、感染症対策をしっかりと行いながら、新しい学校生活に対応できる研修や活動を行い、愛教研の活動が、一歩でも二歩でも前進するよう取り組んでいきたいと思っています。そのためには、先生方のやる気パワーが必要です。是非、先生方のパワーを愛教研の活動に注いでいただけたらと思います。御協力のほど、よろしくお願



やっぱり、あつてほしい



青年部

部長 水口 達也

青年部長を務めて四年目になります。今年度もよろしくお願

「できる人ができることを」「無理なく参加できるように」このようなコンセプトの下、青年部の活動を見直し、新しい形を模索してきました。様々な意見を聞いて、実践して、さあ、これから新しい青年部を確立していこう！という時に、新型コロナウイルス感染症の影響により、活動が全て中止となった令和二年度でした。

組織局の中の青年部は、人とのつながりが必須です。ですから昨年度は何もできませんでした。活動がなければ、計画することも、実行することもないため、部長としての仕事はありませんでした。会に出ることもありませんでした。楽だったのかな？と振り返って見ますと、楽さよりも、学校の外に出ることや、自校外の人と話すことができな

かった物足りなさの方が際立ちました。やっぱり、あつてほしい、会が、活動が。人とながる時間・機会があつてほしいなと感じました。

みなさんはどうでしょう？今年度は、どんな形であれ何かはやりまう！みなさんに会える時、話せる時を楽しみに緊張ります。

学校の味方！
エキスパート！
チーム専門局



専門局

局長 高橋 美鈴

世界中の誰もが経験したことの無い新型コロナウイルス感染症の流行。子どもの人生に関わる教員となつてから、ずっと一番大切にしてきた「人との関わり・つながり」が断たれた二〇二〇年。文部科学省が作成した「学校の新しい生活様式」を基に、各学校には、感染症対策を中心とした学校経営が求められた二〇二〇年。

「体はなれて心びつたり」を合い言葉に、本校でも新し

い学校生活がスタートしました。新型コロナウイルス感染症拡大防止の学校経営において、特に私の味方になってくれたのが、学校には欠かせない重要な役割を果たしてくださっている、

♥養護教諭の先生

♥事務職員の先生

♥栄養の先生

でした。これらの先生方は、学校がピンチのとき、校長の心強い味方、学校の心強い味方になってくれています。しかし、子どもたちを直接指導してくださっている学級担任や専科の先生方は、これらの学校の心強い味方である養護教員、事務職員、栄養職員の先生方の仕事ぶりが、縁の下の力持ち過ぎて分かりにくいところがあるかもしれません。

そこで、本校の養護、事務、栄養の先生方のコロナ禍での専門性を生かした学校の味方ぶりのほんの一部を御紹介します。

「マスクの正しいつけ方の指導を、校内テレビ放送で実演させていただいてもいいですか。」

と、感染症拡大防止のリーダー的存在の養護の先生。

「感染症対策関係の購入物品については、先生方の希望をお聞きして一覧表にまとめてお見せします。」

と、事務職員としての専門性と主体性を発揮して、学校事務の充実に努めてくださる事務の先生。

「給食配膳中の子どもたちの三密を少しでも少なくするために、簡単に短時間で配膳できる献立にしました。」

と、給食の時間を楽しみに待っている子どもたちや私たち教職員のために、学校給食の持つ教育的意義を理解し、安全で魅力ある学校給食の提供に最善を尽くしてくださる栄養の先生。

令和三年には、創立六十一年目を迎える、伝統ある愛教研。その定期総会は、二年連続となる会議の中止と書面表決。これからは、時代の変化にに応じ、オンラインの研修や会議も積極的に取り入れるなど、教育現場も新たな時代を迎えたのかもしれない。そして、そんなときこそ頼りになるのが「その道のプロ」と言われる養護教員・事務職員・栄養教員を束ねた集団、専門局と考えます。

令和三年度、専門局三部会は、次のような活動の充実に努めていきます。養護教員部は、専門性を生かした健康教育の推進並びに専門職としての研修に努めます。事務職員部は、学校力を高める学校事務の在り方についての研究を深めます。栄養教員部は、専

門性を生かした知・徳・体の土台となる食育の推進のための研修に努めます。

学校の味方、エキスパート！チーム専門局！令和三年度も愛媛の子どもたちと先生方の笑顔を輝かせます！

会員の声を生かし、
会員に役立つ活動を



法制情報局

局長 川上 斉睦

今年度、法制情報局長を務めることになりました川上斉睦です。今回、重要な役割を担う法制情報局の活動に携われることを貴重な経験とありがたく感じるとともに、局長という重責に身が引き締まる思いでもあります。

さて、私自身、新採時から会員として、仲間の先生方と共に研究や親睦等のいろいろな活動に取り組んできた身近な存在の愛教研ですが、皆様は法制情報局の活動をどれだけ御存知でしょうか。法制情報局は三つの部から成り立っていて、主に次のような役割を担っています。

【法制対策部】

法制研究を中心とし、教育諸条件の整備改善についての調査、対策、並びに全国組織及び他団体との連絡に関する業務を行います。

会員の皆様が一番なじみがあるのは、各校で行う職場集会だと思っています。子どもたちへの教育の充実を目的に、環境や条件の整備・改善・充実に県や市町に要望する内容を検討・集約する集会です。

また、情報宣伝部と協力して夏季休業中に行う「教育法令研修会」も、大事な活動の一つです。学校教育における諸課題について、専門家を講師に招いて法的な面から学べる貴重な会で、学びたい内容を質問事項として各校から募集します。

【情報宣伝部】

諸情勢の研究調査を中心とし、教育情報の収集と編集及び会員その他に対する宣伝活動に関する業務を行います。

具体的には、会員相互の親睦と情報共有を目的に、「愛教研 教育情報」を編集して年四回発行しています。また、不定期ではありますが速報も出し、タイムリーな情報提供に努めています。

さらには、会員の見識を広げるため、教育に関するあるテーマを基に、いろいろな立場の専門家から意見を伺う

「教育座談会」も実施しています。

【へき地・地域教育部】

へき地教育の充実・発展と、様々な学校の特性を生かした地域教育の研究に関する業務を行います。

今年度の主な活動としては、十一月二日に上島町立弓削小学校・弓削中学校を会場として「愛媛県へき地・地域教育研究大会」を開催するとともに、年度末には、「愛媛のへき地・地域教育」を発刊して研究を集約します。

「地域とともにある学校」は、へき地の学校だけでなく、どの学校にも共通し、教職員の異動や協力団体の人事等でも停滞することなく、持続可能な教育として、その地域の文化となり継承され根付くことが大事です。へき地・地域教育部はその研究を推進しています。

コロナ禍で予定していた活動が変更になったり延期や中止になったりしますが、安全・安心を第一に、各部・各支部の役員や会員の皆様の御協力をいただきながら、「会員の声を生かし、会員に役立つ活動」を進めたいと考えていますので、どうぞ、よろしくお願いいたします。

コロナ禍の中にあつても生活を豊かでゆとりのあるものに



福利厚生局

局長 河野 哲弥

今年度、福利厚生局長を務めることになりました。昨年度は、新型コロナウイルス感染症対策のために十分な活動ができませんでした。心新たに今年度の活動を行っていきたいと考えています。御指導、御支援の程よろしくお願いいたします。

福利厚生局は、愛教研の会員としての意識を高めたり、心身両面の健康づくりと職場環境の向上に努めたり、人生設計を意識した諸事業を推進したり、会員相互の親和を図ったりすることを目的に活動しています。愛教研の会員の皆様の暮らしを健康的で余裕のある豊かなものにしていくために活動内容を工夫していきます。

今年度の主な活動は、「教育文化講演会」「愛教研ピラティス教室」「ライフプランセミナー（教職員福利厚生夏

季研修会）」が挙げられます。

教育文化講演会は、講師に澤田真由美氏をお招きし、「働き方改革」をテーマに教職員が豊かで幸せな生活を送ることができるよう学びの場を設けることにいたしました。

「愛教研ピラティス教室」は、昨年度が第二十回で最後の大会になると決定されていた「中央ボウリング大会」の代わりに新しく取り組むことになった活動です。できるだけ多く会員が参加し、心身のリフレッシュと会員相互の交流ができるようにと実施を検討いたしました。理想的な姿勢と動作を身に付け、日頃の教育現場での疲れを少しでも癒していただき、健康的な生活を送るための学びの場を提供いたします。

「愛教研ライフプランセミナー」では、退職金や年金、ライフプラン等を中心に、教職員が余裕のある豊かで安心な生活を送るための一助となることを願って開催いたします。昨年度は、規模の縮小や開催時期の変更等の努力も虚しく中止となってしまいました。今まで参加していただいた会員の方からは、「退職後の計画を立てることができた。」「今から考えておくことの大切さがよく分かった。」「など好評でしたので、今年度こそはと計画しております。

しかしながら、今年度も新型コロナウイルス感染症防止に対応した活動をしていかなければなりません。それぞれの活動で感染症防止のために、活動方法を見直し、工夫して実施できるようにしていきたいと考えています。変更になる点もありますが、御了承ください。

福利厚生局としては、昨年度十分な活動ができずに御迷惑をお掛けしましたが、各支部におかれましては、こういう状況の中でも、工夫していただき、新型コロナウイルスに負けないよう活動してほしいと考えます。今まで以上に会員相互が親睦を深め、職場や家庭に潤いと新鮮な活力を生み出せる活動が行われることを切に願っております。

最後になりましたが、会員の皆様の生活が、より豊かでゆとりある充実したものになりますよう、部員一同諸活動の運営に精一杯取り組んでいきますので、御理解と御協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。



(令和3年6月30日までの受付分)

平野 周郎	津田中	3	2	14
森下沙央里	上分小	3	3	28
黒田 勝俊	伊方中	3	3	28
合田美浦理	川之江小	3	4	1
薦田 紗永	川之江南中	3	5	2
山本 健作	三島東中	3	5	2
尾崎 良輝	富田小	3	5	2
別府 真依	乃万小	3	5	2
野口 愛	西条北中	3	5	5
弓立 隆弘	宮内小	3	5	5
田淵 悠二	弓削中	3	5	8
渡部 正規	金子小	3	6	6
井上 純奈	角野小	3	6	6
東 和浩	窪田小	3	6	6
岩村日菜子	明倫小	3	6	6
須藤 恵美	北条南中	3	6	28

前号の本欄に掲載しました窪田 佳奈先生の勤務校が誤っておりました。正しくは、浅海小学校です。お詫びして訂正いたします。

初心



今治市立日吉中学校

村上 拓也

私は約三年間の講師経験を経て、今年度新規採用教員となった。まだ短い教員生活ではあるが、自分なりに大切にしている思いがあるので紹介させていただきたい。講師としての一年目、当時の校長先生が「気持ちを通じ合えば子どもは喜ぶ」とおっしゃった。さりげなく発されたその言葉が、とても私の心に残っていた。その日から私は生徒の気持ちを理解したいと思うようになり、生徒との会話を増やすようにした。また、学校行事に向けて気持ちを一つにしようと円陣を組むこともあった。

二年目は副担任として勤務することになった。前年とは違う立場での勤務であったため、違った視点で学校を見ることができて新鮮であった。しかし、学級担任であった昨年と比べて生徒と関わる時間が減り、少し寂しさも感じた。

特に寂しさを感じたのは行事の日であった。前年度は、運動会や文化祭の朝には生徒と一緒に気持ちを高め、終了後には一緒に喜んで嬉しがりたりした。そのような時間が、その年にはなかったのである。合唱コンクールを終え、教室で生徒と気持ちを分かち合っている先生方を見て、とてもうらやましく思った。

三年目は、再び学級担任を任せてもらえることになった。私は、「目一杯、生徒と気持ちを分かち合う」と決意して学級をスタートした。特に、様々な行事が開催できるか危ぶまれる中で、良い時も悪い時も生徒の気持ちに寄り添うと強く決めていた。

自分なりに日々、大切に生徒と向き合ってきたが、最も気持ちが通じ合えたと感じたのは離任式の日であった。職員室で待っている私を生徒が呼びに来てくれた。泣いている。寂しいのか。ありがとう。先生も寂しい。教室に入ると学級委員長や代表の生徒が次々と言葉やプレゼントをくれる。「来年も先生の授業を受けたかったです。」ありがとう。先生もみんなに授業をしたかった。「先生のクラスでよかったです。」

なれてよかった。みんなと過ごす最後の日、同じ気持ちになることができた。また、生徒が思いを言葉にしてくれたこともうれしかった。

気持ちが通じ合えば子どもは喜ぶ。こちらもうれしくなる。私はこれから始まる教員生活の中で、一人でも多くの生徒と気持ちを交わし、共にたたえ合える関係を築きたいと思っている。

幼稚園の先生に学ぶ



松山市立北条南中学校

武内 香奈枝

昨年度から幼稚園に通う娘は今年四歳になる。昨年、水筒の買い替えを検討していた頃、参観日があった。

私が園に行くと、ちょうど子どもたちが外から帰ってきてみんなでお茶を飲んでいました。そこへ、たまたま園長先生がやって来られた。「どんな水筒が良いんですかね？」

と聞くと、「昔ながらのコップ付きのものが良いですよ!」と言われた。これは意外だった。「直飲みできるタイプのものが増えてきて、すごく便利なんだけど、『どれくらい』っていうのが子どもたちはわからない。コップに移すのは面倒だけど、そうやって自分にとって『ちよいどよい』量を学ぶことができた。目から鱗だった。

私はその言葉を受けて、迷わずコップ付きの水筒を購入し、家で娘とお茶を注ぐ練習をした。最初は小さなコップにうまく注げなかったが、回を重ねるうちに上手になった。そして、飲み終わって蓋を閉めるとき、コップが逆さまになるので、しっかりと飲み切っておかないと周りが濡れてしまうことを学んだように、娘はコップが空になってからも、しばらく飲み干す仕草を続けていた。

なるほど、これが自分にとって『ちよいどよい』を考えるということか、と娘の様子を見ながら思った。不便なことがあると、どうすれば改善されるかを考える。そして、どうすれば効率よく『ちよいどよい』状態を生み出せるかを、試行錯誤しながら自

分自身で見付けようとする。しかし、現代は何でも自動になり、『ちよいどよい』は自分の意識の外で勝手に行われてしまうことが多い。自分で自分の必要な『ちよいどよい』を考える機会が、子ども時代には特に大切であるのだ、と園長先生に教わった。

幼稚園の先生はすごい。どんな時も明るく、子どもを全力で褒める。そんな先生方の姿を見て、私は自分の生徒たちを褒めていなかったことに気が付いた。どうしてもできないことに目がいつて、あれもこれもできない!と憤慨していた。でも、幼稚園の先生は違う。できないことが当たり前で、できるようになったことを、それはもう全力で褒めている。そんな姿を身近で見、ハッとした。できないことをできるようにするのが教育であり、学校の役割なのだろう。こちらが求めることをすぐにできる子ばかりではない。でも、今までできなかったことができるようになったとき、幼稚園の先生方のように、大きな愛を持って、褒められる先生に、親になりたい。

みんなの

どうい状態を生み出せるかを、試行錯誤しながら自



日本に、京都があつて
よかった

八幡浜市立八代中学校

山村 正美

『日本に、京都があつてよかった』

これは、地下鉄に貼られていた京都市のポスターのキャッチフレーズ。まさに、私は京都を訪れるたびにこの気持ちになる。

以前の私にとって「京都」といえば、修学旅行の引率で行く所、「仕事で行く場所」であった。いつも行き先や時間は限られており、「京都を楽しむ」という感覚はあまりなかった。しかし、二人の娘が京都の大学に進学し、私が京都に行く回数が自然と増えた。同時期に、当時勤めていた中学校で、世界遺産を巡っていた方の講演を聴く機会に恵まれた。その方の「世界遺産の歴史を知り、人生観が変わった」という話を聞き、京都の世界遺産巡りをしたいという気持ちが高まった。

京都には、十七のユネスコ

世界文化遺産と約二千以上の寺社がある。私は京都に行くとき、まずは娘たちの下宿先で、部屋の掃除をする。心の中で「ここは京都ではない」と思い込み、掃除に専念する。掃除が終わると、事前学習した世界遺産を巡り、楽しむのだ。

ちなみに、私の中で一番のお気に入りには「龍安寺」。みなさんも御存知のとおり、龍安寺で有名なのは石庭と蹲踞（つくばい）だ。石庭は築地塀に囲まれた七十五坪の中に、緻密な計算が隠されてお

り、十五の石は全てを一度に見ることができないようになっていて。また、遠近法を利用して、塀は奥に向かって低くなっている。この石庭を見る時は、何も考えず、心を無にしなければならぬ。心が入ってしまふ。

方丈の裏手にある蹲踞には、中央の水溜めの周りに文字が書かれているが、それらはすべて、中央の水溜めを「口」の字に見立てていて、「吾唯足知」（われ、ただ足を知る）と読む。

『今の己に満足し、全ての恵みに感謝せよ』という禅の



広場



教えられる。現代は物にあふれた時代で、もつとよいものを追いかけて、他人と比較したりする傾向にあるが、いくら富を持っても、知足の心がなければ欲望は増すばかり。現状で足りていることを自覚するのが大事ということらしい。なるほどと納得し、心が穏やかになる。

現代的な都会の空気も、懐かしい田舎町のような自然の空気も、どちらも味わえる京都。今はコロナ禍で、京都に遊びに行くことができない。京都で学びたいこともまだたくさんある。再び京都を訪れることができる日を心から願っている。

痛みと課題



伊方町立伊方小学校

宇都宮 彰一

連休前に、ちよつとしたことがあって肋骨を二本折った。靴下を履くための前屈が

つらい。連休中は、しかたなく土踏まずまで履いた靴下で過ごした。咳をしても痛いので、横になって「課題」について考えることにした。そのときに考えたことをこの原稿に記そうと思う。原稿を読む人は、ぜひ、私になったつもりで、塀から落ちて、肋骨を強打してほしい。

若者が、貧困などの社会の課題に取り組む番組を見て、わくわくするような勇気をもった。なぜ、そんな気持ちになったのか。それは、「リア充」「勝ち組・負け組」「経済格差」など、他者と自分を比較して消費をとおる社会で、「課題解決」によって社会に貢献すること、一つの価値として実践する姿に、教育の可能性を感じたからだと思う。

課題とは何だろう。課題は大きく二つに分けることができる。「肋骨の痛みを何とかしたい」というのは私の課題で、「子どもの運動量の二極化をどうすれば解決できるか」は社会の課題だ。どちらも切実な困り事だが、社会の課題の場合、それを裏付けるデータが必要だ。もしかしたら、自分の思い込みかもしれない。肋骨の痛みは思い込みではない。この痛みが思い込みなら、別の病気である。

また、解決できること、よい解決方法があることも重要だ。神の存在など、考えても解決できない理性の限界はカントが論じたとおりだ。いろいろ定義はあるが、「課題とは、解決できたり、最適解を導き出せたりする、自分や社会の困り事」として進めていく。

課題を解決するのは誰か。もちろん当事者だが、自力で解決する場合もあるし、支援者の手を借りる場合もある。臨床心理学者の河合隼雄さんも「相談者が自分の困り事を話しているうちに自然治癒していく」と著作の中で語っている。社会の課題は、当事者と研究者や支援者が協働作業を行ないながら解決していく。相談者や支援者がいるということとは大きな意味があるようだ。では、何をもち課題解決とするか。答えが見付かって終わりではなく、当事者の納得や満足感、達成感が加わって、ようやく解決したと言えるのではない。

『課題』について掘り下げて考えたおかげで、学習における「課題」の重要性に改めて気付くことができた。

機会があれば、「評価」についても考えてみたいが、私の体がつかどうにかにかかっている。

新居浜支部

野菜で未来をつくる

新居浜市立別子中学校

池田 光希

へき地にある本校では、新居浜市の「学び創生事業」として、校区外から入学してきた生徒十六名が寮生活を行っています。学校では、少人数の良さを生かしながら英語を中心に学習に力を入れて、意欲的に学んでいます。

そんな生徒たちは、昨年度から、地域での野菜づくりに挑戦しています。それは、ある生徒の行動から始まりました。別子山地域の現状やSDGsについて学んだその生徒は、地域の過疎化という課題について考えるようになり、この地域課題を、SDGs17「パートナーシップで目標を達成しよう」で解決しようと、野菜づくりを提案しました。合い言葉は、「地域と共に野菜をつくることで、共に未来をつくる」。農園の名前は「別子ファーム」です。

いざ、野菜づくりを始めようとするものの、生徒はもちろん、教職員にも農業に精通

している人はいません。しかし、地域の方々の力を借りるとすくすくと野菜が育ち、大人も子どもも次々に新しい発見の連続です。耕した畑の土の柔らかさに驚いたり、枯れかけた野菜が地域の方の知恵で元気を取り戻したり、いつも食べている野菜の花の形や、実のなり方を知ったりと、体験してみても初めて感じたこととや分かったことがたくさんありました。同時に、台風という自然災害の怖さも実感しました。

生徒たちは、野菜を我が子のように育て、その姿に地域の方は喜び、生徒たちを我が子のように大切にしてくれました。収穫できた野菜は、地域に配ったり、家族に持つ



未来をつくる農園名は「別子ファーム」

各地だより

伊予支部

おやじの力

伊予市立郡中小学校

松江 直樹

中庭で空を見上げる子どもたちの視線の先には、大小約八十匹のこいのぼりが気持ちよさそうに泳いでいます。こ

れは、郡中おやじの会の「こいのぼり大作戦」の活動です。保護者や地域の方、教職員が休みの日に学校に来て、北校舎と南校舎の間にこいのぼりを泳がせます。この活動は、家庭で使わなくなった大きなこいのぼりに第二の人生を与え、子どもたちに喜びと楽しみを与えてくれます。

郡中おやじの会は、保護者と地域の方々、教職員により作られました。子どもたちのために、「できることをできる人」を合い言葉に多種多様な業種のおやじたちが集まり、活動しています。

おやじの会は、「こいのぼり大作戦」の他にも様々な活動で伊予市や郡中つ子を応援してくれています。七月下旬に開催される伊予彩祭りでは、手作りの山車でパレードに参加しています。山車のデザインは、児童から募集します。週末に何回も話し合いながら山車は完成します。

また、学校のふるさとまつりや地域の行事では、「おやじの焼きそば」店を出店しています。さらに、郡中駅周辺にイルミネーションを飾り、伊予市の町を明るくしてくれています。これは、郡中地区の冬の風物詩にもなっています。

す。その他にも、愛護班が学校で行う「逃走中」や「肝試し」などにも協力してくれています。

おやじの会の活動は、保護者間の関係が希薄になってきている今日において、地域をつなぐ役割を果たしており、子どもたちや教職員にとっても、なくてはならないものとなっています。現在、新型コロナウイルス感染症対策のため、おやじの会の活動が自粛されているので、今年は、教職員で中庭にこいのぼりを泳がせました。二年ぶりの「こいのぼり大作戦」でしたが、やはりおやじの力が郡中小学校を支えてくれていると改めて感じました。

今後、「できることをできる人」を合い言葉に、おやじの力と教職員の力を合わせて郡中小学校の子どものために頑張っていきたいと思っています。



「こいのぼり大作戦」
校舎間を泳ぐ約80匹